

円山公園にみる都心郊外山麓の公園成立と変遷に関する社会文化的視点からの史的考察

Historical Research on How a Park Located on a Foot of a Mountain in the City Suburb has been Established and Changed over Time from Sociocultural Perspective in the Maruyama Park in Sapporo

小林 昭裕*

Akihiro KOBAYASHI*

Abstract: This study examined the processes of contextual affection among stakeholders toward Maruyama Park, which was located beyond the administrative boundaries of the city, using sociocultural perspectives. The proximity of the park to Sapporo Shrine was thought to impart special meaning to the place. The Sapporo Subdivision Congress and city mayor were eager to establish a park in the former forestry experiment station site. The Maruyama Park plan made by Nagaoka to comply with the requirements of the Sapporo Subdivision appeared to have defined the framework for the park of today. The need of the shrine to fulfill upgrading the level of shrine and the deep relationship between the citizens and the shrine had made the beautification of the ground with cherry blossoms, and became Maruyama Park and shrine as a famous place of appreciating cherry blossoms. Several stakeholders of Sapporo civil society have involved for establishing nature conservation and recreational use of the Maruyama Park and around area. This study clarified those values from sociocultural perspective: identity of the place, relationship among stakeholders, momentum of social background, effect of civil activities in environmental conservation and recreational use.

Keywords: *sociocultural, history, location, shrine, park, Maruyama*

キーワード: 社会文化, 歴史, 立地, 神社, 公園, 円山

1. 緒言

公園を社会文化的視点から読み解く視座として、「地表面に刻み込まれた痕跡から人間活動のあり様や自然環境との関係を読み解くことに重点を置く見方と、深層にある意味、とりわけ人々が生きていく中で相互に関わり、自然との関係を積み重ねることによって構築された意味の探究を目指す見方」¹⁾が参考になる。

人々の思い出を記憶し刻み込んだ場所として「歴史的公園」を具体的に再生するには、「公園の成立史、計画者の思想や当該公園の計画コンセプトやデザインポリシー、開園後の事件や改変など公園空間と利用の変遷史など、『公園生活史の造園的研究』が不可欠である」と進士²⁾は述べている。また、小野³⁾は公園の文化的価値に関し、場所という切り口から、「物的空間のみならず社会的空間として、その公園及びその周辺環境に積み重ねられた履歴のもたらす価値」を指摘している。

札幌の中心市街地に拠点となるオープンスペースとして明治期に成立した緑地・公園のうち、大通については社会文化的視点から⁴⁾、中島公園については自然立地特性を加味し、いずれも経時的に史的考察がなされた⁵⁾。本研究で事例とした円山公園は、大通や中島公園と異なる特性を持つ。その特性とは、明治時の札幌市街から離れた郊外、行政区域外に設置されたこと、観桜の名所として札幌市民の生活歴の一部を担っていること、試験官園である円山養樹園の跡地に円山公園が成立したこと、円山公園は管理者が異なる区域（円山競技場、円山動物園）を内包すると同時に管理者が異なる区域（北海道神宮、天然記念物である国有林が管理する円山）と隣接すること、公園内散策に加え、円山山頂までのハイキング利用と山麓の神社参拝、動物園や競技場などの質の異なる空間が併存するが、「円山公園」マップガイド⁶⁾に記載されるように行政・市民がこれらを一体的に捉えていることである。

本論では、公園成立史、公園計画の思想、公園及び隣接域に積み重ねられた空間と利用の履歴に着目し、円山公園の特性を社会文化的視点から史的考察した。本論の構成として、行政区域外に

立地した点に関し、主に都市計画における意味づけに焦点を当て（第3章）、伝統的な観桜の名所の成立に関し、主に公園に隣接する神社及び市民との関係性に焦点を当て（第4章）、公園の発端の経緯が公園整備を規定する要因とされることから⁷⁾、公園開設が実現化した経緯と、公園の計画・設計思想等に焦点を当て（第5章）、公園および隣接域がどのような社会的認識を背景として変容したのかを、円山全体の保全・利用に焦点を当て（第6章）、論考した。研究対象の期間を、都市公園法成立後と以前では法制度を含めて利害関係者と公園との関係が大きく変化することから、本研究では、都市公園法成立以前（1958）に限定して検討した。

2. 調査方法

欧米近代化思想・技術の導入により、荒蕪地の開拓から始まるという、府県とは異なる社会的歴史性を考慮し、円山公園に対する既往研究として田中⁸⁾の成果等を検証しながら、各章の焦点に即して、円山公園および隣接域への周辺住民や管轄行政、団体、専門家等の関心・働きかけに着目し既存資料や文献を通じ、史実を整理した。本論上の重要な史実に関しては、公刊、行政史資料、新聞記事、関連文献調査を行った。なお、近世から近代への移行期という時代背景を織り込み、文献資料の不足している点を推論で全体像を論考した。本論では、異なる専門分野での既知の知見を社会文化的視点から再整理することを基本に、史料の解釈を行っており、解釈に議論の余地があることを付記する。

3. 立地場所に対する、都市計画上の意味

五稜郭の戦い終結後、1869年5月、明治天皇は蝦夷地開拓について勅問を行った。明治政府は、ロシアの南下政策を背景に北海道における「開拓」と神道普及による「教導」を不離のものとして捉えていた⁹⁾。「開拓」と「教導」との関連性は、「札幌での神社の建設は本府の建設を前提条件とした。本府の都市計画の一部として神社創建が構想されたため、・・・」¹⁰⁾と記されている。

*専修大学経済学部

開拓使の島義勇判官（以下、島判官）は、開拓三神を奉じ、1869年9月20日に銭函に到着した。「教導」の拠点となる神社の位置について、1869年11月、御宮地掛となった早川清太郎が神社の鎮座地を上申、島判官は上申に基づき同月中にその地を見分、鎮座地として決定した¹¹⁾。島はその心境を、「・・・以相社地、得之府下西南三十丁外、小芙蓉峰小瀑布泉間。賦一絶、以記奇異。蓋早山熟知傍近山川者、即我北道主人也。三面山圍一面開 清溪四繞二層堆 山溪位置豈偶爾 天造応期社地来」¹²⁾と漢詩を詠んだ。

島判官は三方を山に囲まれ、清らかな溪流が二重の丘を巡るといふ地形的特徴が、神社の鎮座にふさわしい地相と判断していた。この時期の本府建設計画を知る地図史料として、島判官が計画の素案を示した「石狩大府図」¹³⁾には、御宮の位置として、西に芙蓉峰と称した山が記載されている。芙蓉峰は山の形状と位置から現在の三角山と判断される。また、三方を山に囲まれ、清らかな溪流が二重の丘を巡るといふ地形的特徴から、神社の位置は、現在の北海道神宮に近い位置と推定される。

御宮の決定を踏まえ、「開拓」の拠点となる本府の位置について、1869年11月島判官は、鎮座地として想定した円山の「コタンベツの丘」から、東へ一直線に道を開き（渡島通・現在の南1条通）約一里の地点、大友堀に交わる地点を基点標（南一条西1丁目）とし、創成川を掘削、札幌を碁盤目状街区の基礎とする構想を上奏した¹⁴⁾¹⁵⁾。しかし、1870年1月に島判官は解任され、本府建設は一時中断、1870年10月開拓次官黒田清隆の建議によって再開された。11月、神社の位置について「社地ノ儀最前丸山ノ麓見立相成候場所、本庁ヨリ西ニ当リ距離三十六丁、銭函往還ヨリ拾三町、別図ノ通ニ有之、今日ニコソ少シ遠キ様相覚候得共、后来盛大御開府候儀ニ候得ハ、不相応ノ地所共不相見間、右丸山下へ御建立可然ト存候事」¹⁶⁾。社地と設定された場所は、本庁から遠く離れているように思えるが、将来の発展を見込み、適切としているが¹⁷⁾、町の東西軸という記載はない。

一方、1871年に偕楽園を開設した岩村判官が同年、「計画ハ北ハ偕楽園、南ハ中島、西ハ円山、東ハ苗穂（御料局付属果樹園ノ辺）ニ公園ヲ設ケ其間ヲ市街トナス（中略）」¹⁸⁾とされ、岩村は市街地の西に円山を公園として配置する案を構想していた。市街地と神社の関連性に着眼した天野は、「石狩大府指図」に、石狩大府とほぼ同じ文字の大きさで「御宮」が書かれており、政庁となる開拓使と同格の存在として神社が重視されていたと指摘した¹⁹⁾。また、鎮座地が、象徴的なランドマークとしての円山山麓に位置し、市街地を俯瞰すると同時に東西の基軸線・大通へと連続する構造となっていることを指摘した²⁰⁾。中でも後者については、明治六年に市街地側と神社を直線的に結ぶ新道路計画が持ち上がったことを紹介し、「札幌神社が、市街地の延長上に、市街地との位置関係を明確に意識した場所に建立された」と指摘した²¹⁾。「札幌神社新道、開造ノ件 付図」を確認すると²²⁾、天野が示した大通ではなく、島判官が本府の基軸を設定した渡島通（現在の南1条通）と鎮座地が直線上に接続されていた。

また、円山公園開設後、1925年に都市計画北海道地方委員会が作成した「札幌都市計画区域図」²³⁾の区域設定では、円山を含めた範囲が確認された。同年、「大札幌市区域及び地域設定略図 附公園廣路計画図」²⁴⁾には、南北軸となる創成川通と中島公園、東西軸となる北一条通と円山公園が接続された図が作成された。その後、円山村が札幌市と合併したのは16年後の1941年である。

1869年～1873年の動向を中心に整理すると、対外政策を背景に、「教導」の拠点となる札幌神社の位置は、鎮座予定地の立地地形を踏まえ、本府を俯瞰する丘に位置し、この場所をもとに「開拓」の拠点となる本府市街地整備の基軸が設定された。このことは、本府市街地内にあった火防線（のちの大通公園）や、市街地の南に隣接した中島遊園地と異なり、円山公園が当時の行政区域

外に立地するにもかかわらず、「教導」の拠点となる神社が立地した円山一帯が、開拓本府の都市計画上、重要な意味をもつことになったと考えられる。本府の東西軸である南1条通の延長上に鎮座地を付置させた意図は、天野が指摘した市街地の東西基軸として鎮座地を位置づけた説を追認するとともに、円山を公園予定地とした岩村判官の構想の背景だけでなく、後の広域都市計画にも反映されたと推察される。

4. 伝統的な観桜の名所としての成立

神社境内のサクラの由来について「・・・手稲の人福玉仙吉宮司大貫眞浦同白野夏雲等前後数回之に増殖し或は溜池を設け或は牧草をは種し専ら域内の美観を添えんことに力む斯うして経営年を重ねしより風致漸くみるべきものあり・・・」²⁵⁾と概略が記載されている。サクラの名所となった起原は、1875年4月、福玉仙吉が、1874年に佐賀の乱で斬首刑された島義勇の威徳を偲び、下男と一緒に山々を歩き、桜樹数百本を集め、枯死を見越して170本を選び150と称し献木したことに始まる²⁶⁾。これに対し札幌神社から1875年4月29日付けて「年来の素願にて今般当社へのサクラの苗木百五十株献納候段奇特之事に付別紙目録之通賞与候事」と謝状が出た。このエゾヤマザクラは第二鳥居から社殿に向かって左右両側に列植された²⁷⁾。1878年には大貫眞浦宮司が500本のサクラを増殖した。次いで白野夏雲宮司らが自ら種子を栽培したチシマザクラと紅山桜を社殿の周囲と参道に植えた²⁸⁾など、境内の美観向上によって参拝客の来訪、地域社会からの信仰を促すため、歴代宮司の中でサクラの植樹に熱心な方がいた。

円山村民及び札幌区民と、札幌神社との関連を見ると、1871年、神社の仮本殿の造営工事に際し、円山村から神社までの8町歩余の参道整備では、開拓使人夫のほか、円山に居住していた45戸の農民が開墾に奉仕した²⁹⁾。円山の移民は、鎮座後も、神社からの要請があれば、年中いつでも率先して、境内の雑草刈、植林地の地均し、参道の補修などの奉仕を行った³⁰⁾。1883年に裏参道が開墾される以前、札幌市街との道路が不完全で、主として円山村民が奉仕し、札幌神社は円山神社と俗称された³¹⁾。

1878年、札幌神社は市街地と離れ、冬ともなると参拝もできないため、「当地は極寒の地殊に積雪の際は老幼は勿論壯年の者と雖も本社に参拝すること容易ならず之が為に本社御創立の御聖志に背き奉り或は一般人民の敬神の念慮薄らぎ行かんことを嘆き時の宮司大貫眞浦種々苦心の結果明治十一年六月使庁及内務省に出願して札幌区南二条東三丁目十番地札幌神道事務分局内に遥拝所を設く・・・」³²⁾という願いを大貫宮司は開拓使と内務省に出願し、1878年8月7日開拓使から遥拝所（南2条東3丁目）の建設の儀が認可された。1878年10月4日 神輿札幌市中巡幸の儀が認可された際、大貫宮司から内務省宛の願書に「入費ハ悉皆人民ヨリ可差出義ニ付、聊不都合ハ無之」とあり、渡御費その他費用については、市民が負担するため、費用の捻出に心配ないことを報告していた³³⁾。

翌1879年に札幌市街で神輿渡御開始以降、この祭事は札幌区民の祭りとして定着し始めた。1893年2月に白野宮司の發議で40人余人が集合し「従来祭典は専ら宮司一己の手に出づるがゆえ充分盛大なる能わず、且つ其費用等の如きも不足勝」³⁴⁾であったが、同年からは札幌区民の尽力で十分盛大に挙行したいとの宮司の考えを踏まえ、協議を行った結果、祭典区（区域毎に例祭の準備と運営を行う組織である。当時、札幌区を4区に分け、祭礼に関する事柄を各祭典区の祭典委員が担当した³⁵⁾）が結成された³⁶⁾。以降、祭典区を中心に札幌区民が祭典の主体となり、後に市民の神社としての認識を広めることにつながった。なお、札幌の人口は1871年に624人、1882年に9,001人、1887年に13,534人、1892年に26,022人、1897年に35,306人と³⁷⁾、行政主導の開拓

拠点から住民主体の都市に変貌し始めていた。

一方、札幌神社のサクラに対する認識を札幌区民の側からみると、1887年5月の北海新聞によれば「円山は市街を距ること里余樹木蔚葱、山あり、水あり、大気は清涼にして幾と紅塵を去るとも云うへき閑静幽雅の地なれば瓢を携え漫步鬱を散せしむるに足るゆえ一昨日などの日曜日なれば大分本庁官吏諸氏には彼方へ趨れたる由」と初めて円山を紹介し、漫步とあるが、サクラに触れていない³⁸⁾。1889年5月の北海道毎日新聞は円山の花信として、「円山なる札幌神社は市街を距る里許なるが同境内に在る一百余様の桜花今日を競ふて既に三分の笑みを含みたれど本日頃が恰度見ごろなるべく・・・」など境内のサクラについて触れ、その数を一百余としている³⁹⁾。境内のサクラの数の多さを記載しているが、観桜する市民の姿はない。また、「明治27年札幌神社境内見取図」⁴⁰⁾には、鳥居からの参道、社殿の周辺にサクラが植栽されていることがわかるが、観桜する市民の姿はまったくない。

1899年3月、白野宮司は、春の観桜に向けて「官幣中札幌神社境内之春光」⁴¹⁾と題するポスターを発行し参詣人に配布した。そのポスターには境内のサクラをめぐるため多くの参拝客が来訪している様子や、赤の毛氈に紅白の垂れ幕など、観桜を楽しむ姿が記載されている。そして「参詣人も次第に増えてきた。とくに花見時の境内は、大変な賑わいを見せている。そこで昨年の花見時の光景を石版で世に披露することにした。それは本道開拓の進歩を知る一助になることだろう。今年は昨年よりさらに賑わいを増すことと思う。」⁴²⁾と記載されている。

1911年に札幌神社が発行した「札幌神社志要」⁴³⁾によると「・・・専ら城内の美観を添えんことに力む斯して経営年を重ねしより風致漸く見るべきものあり明治30年の頃より札幌及付近の町村より観桜の地となり花時は日々数万の群集を見るに至れり」。「官幣中札幌神社境内之春光」で示されたように、神社当局が積極的に境内を解放し、参拝客に花見の場を提供したことで、札幌はもとより、近郊の道民からも暖かく迎えられる存在に神社になった⁴⁴⁾。境内を解放した点について「・・・当時の白野夏雲宮司と考えたい。白野宮司は、社格の昇格問題に腐心していた時で、神社の地域への奉仕を考え、積極的に地域との結びつきを考えてのことであろう。」⁴⁵⁾とされた。実際、1893年11月官幣中社に列格、1899年7月官幣大社に列格された⁴⁶⁾。

「町村誌資料」⁴⁷⁾の「藻岩村」に「円山公園ハ札幌神社境内ニ在リ桜花ヲ以テ名有リ境内ノ桜樹数百株稚松老樹ノ間ニ点在シ花時ニハ全都ノ士女麁集塾開子極ム秋季モ亦観楓ノ遊客踵ヲ接ス稚客此地ヲ以テ京都ノ円山ニ比ス蓋シ円山・・・」。その後、境内の桜花は全道的な名所となり、特に花見時期の参詣者は著しく増加し円山のお花見は道民の生活暦の中に定着していった。1909年6月25日、福玉仙吉は再びサクラを献木したが、神宮の桜木は1915年11月10日大正天皇即位式の記念植樹をはじめ、各種の国や道のお祝い事の時などに植えられたものも少なくない。ほかに個人で何かの記念に奉納されるほか、花見時に掛茶屋を出す花商組合などが中心となって一般からも寄付を集めて献木したことによって、境内はサクラで埋まった⁴⁸⁾。

1875年～1915年の動向を整理すると、福玉仙吉による神社境内へのサクラの植樹を端緒とし、神社側の狙いは当初境内の美観を高めることにあった。神社関係者によってサクラの植栽がなされたが、市民に開放されていなかった。その後、境内を開放した背景として、神輿渡御を通じた地域社会と神社とのつながり、1893年に祭典を盛大にするため神宮側からの発議により札幌区民が祭典の主体となるなど、神社側にとって地域奉仕を通じた社格の向上を狙いとして、札幌本府との連携強化があったと考えられる。1909年に円山公園が開設されたが、札幌神社だけでなく、円山公園を含めて市民社会にサクラの名所として認識された背景

には、札幌開府の基礎を構想した島判官に対する思いから始まった境内へのサクラの植樹、次章に記述する長岡安平が提示した円山公園設計案において、神社境内を含めて円山公園が設計されたこと、市民や行政などによるサクラの植樹が行われたこと、観桜という実体験を通じて、神社を含む円山公園を一带とみる空間認識が市民社会に定着したこと、さらに江戸時代からの観桜の名所が明治期に名称が公園化されるなど、観桜と公園が連想されやすいという社会認識があったことなどが考えられる。

5. 公園開設の発端と公園の計画・設計思想

開拓使は種苗養成のため、1871年、函館七飯に試験場を設置し⁴⁹⁾、それを受け継ぐ試験場として、1880年、現在の坂下グラウンドを含む一帯約6万6千坪に、円山養樹園を設置（道内に成育可能な樹種研究のため）した⁵⁰⁾。1890年10月、養樹園地積62町9反2畝10歩が御料林に編入され帝室林野局札幌管理局の管理となり⁵¹⁾、1901年に札幌での使命を終え上川の神楽村に移された。

世情に目を転ずると、1885年に内務省が「東京市区改正設計審査会」を設置、1888年に東京市区改正条例公布、1890年に東京市区改正設計で日比谷公園が告示された。札幌本府では、1887年に中島遊園地が開園、北海道庁が1896年に「殖民地選定及区画施設規定」を策定し、「公園、遊園地」を用地として明記し、社会的に公園開設の機運が高まっていた⁵²⁾。札幌神社と札幌市民との関係を前章から整理すると、1893年に神輿渡御に掛かる祭典区が設立、遅くとも1899年には神社の観桜を多くの市民が楽しみに参集するなど、札幌市民と札幌神社のある円山の地との関係は深まっていた。1899年、札幌では区制が施行、1900年12月の区会に花村、宇野両区議が札幌公園の設置を建議し、中島遊園地を繁華な公園とし、円山に静謐な自然公園を設置する意向を委員会で決定した⁵³⁾。

円山公園地無償貸付の件について、「円山公園地無償貸付の消息：・・・御料地円山養樹園六十町歩余の無償貸付の件につき、其の後の消息を聞くに御料地は元來収益を目的とするものなれば直ちに承諾をなし難し且つ是等の処分は同支庁長の権限外にて本局の指揮を仰がざる可らざればとて過日其願書を本局に回送し其決定を受くることとなりたり。なお右に就き加藤区長は熱心に運動し田町支庁長を大いに其趣旨を賛同し・・・」と報道された⁵⁴⁾。当時の加藤区長の努力と御料局札幌支庁等の好意あるいは計らいにより、1903年、札幌区は御料局に円山養樹園の貸下げを申請した。

区議会の動向について、「円山公園新経営に就いて：札幌郡円山村養樹園を借り受け札幌区の新公園を造成するの件は刻下の問題なるが右新経営反対側の意見なりと云うを聞くに我が札幌区は近年区費非常に膨張し区民一般其負担に堪えざる今日縦しや将来に多少の企望ありとするも云はば不急に属する本経営を為し年々二百円の借地料を支払うが如きは不可なりと云ふに在り又公園新経営論者は我が札幌区の経済は如何にも反対派の云ふが如く近年多大の増加を見たれども区は年々中島遊園地の所得金三千余円を食ひおるあり之れ札幌区としては餘り讚たる話にあらず故に其内幾分を割き本事業を經營するに何かあらん否な当然なすべく起こすべきの事業なり云々と主張し居れり而して此問題に対する区の理事者及び区会議員の多数は後段の論旨に賛成の意を表し居ると云えば多分後者に決定し近い将来に着手するに至るべしとなり」⁵⁵⁾。区費膨張下の時期での公園整備計画のため、区内では賛否両論が出されたが、中島遊園地から得る賃料の活用案により賛同を得た。10月22日の臨時区会で円山養樹園の借り受けが可決され、1903年11月、公園予定地として62町歩9反2畝10歩が20箇年、年額207円の借地料をもって貸下げが承された⁵⁶⁾。

貸下げ案を可決した1903年12月10日、村田不二三ほか六人が、予算の臨時部の公園費中に調査費などを計上するように建議

した。その理由として「都市ニ公園ヲ要スルハ論ヲ俟タズ。」として、中島遊園地と円山公園の整備について「・・・公園ノ如キ之レガ創始ニ当たり宜シク地ノ理ヲ相シ天然ノ形勢ニ鑑ミ或ハ園芸家ノ意見ヲ徴シ或各地ノ公園設計ヲ參酌シ以テ公園ノ規模ヲ算メ詳細調査ヲ為スノ必要ヲ認ム・・・」。この建議は区会で賛成を得て、藤井民次郎らを調査委員に指名した⁵⁷⁾。

その後、公園の設計について、「明治40年になって、東京市役所嘱託員長岡安平と田中真次郎に中島遊園地と円山公園の設計を依頼した⁵⁸⁾。1907年10月、設計が完成し新聞紙上に発表された⁵⁹⁾。「札幌区にては昨年七八九の三か月に亘り長岡安平氏の設計に係る区域六十町歩に渉る円山公園の起工は来る五月頃園芸師田中真次郎氏の出札を乞ひ同氏の意見に基づき三千円の予算を以て着手すべしと・・・」⁶⁰⁾。「・・・41年度に於いて両公園設計調査費三千円を支出し、長岡安平を聘し、其計画図案を製せしめたる・・・」⁶¹⁾。記載内容を突合すると、1907年に長岡に設計が依頼され同年秋に設計図が仕上がし、翌1908年に工事開始のため田中が現地確認を行い、計画図案が受領されたものと解釈される。

長岡が提示した円山公園の設計内容について、「札幌円山公園設計方針：・・・一たひ是に登れば神気快活自ら俗塵を離れ仙界に入るの威あらしめ衆庶偕楽の地として好適の地なり況や札幌神社の境内は東西南の三方公園に接続林または扁柏杉松樹の緑滴たる森林のごときは本道に罕に見る所にして最も妙とす故に之か連絡を計るに於いては境内を高尚ならしむると同時に公園の美観を添え全国に稀なる大公園と信す斯る天然の景勝に對し妄りに人工を加へ多くの花木を植ゆるときは独り此地の景致を損するのみならず却て勝地を害するの謗りを免かることは能はず故に主として天然の美景を発表するに力め猥りに人工を加へざるの方針を採れり之か設計を判明ならしめんため全境を二区に分割し」⁶²⁾。

「第一区 円山公園入口右側現在の畑地の中央に溪流の下游を引注し大池を新設し水草各種を点綴し魚を放養して老人婦女子の娯樂に供し其周囲全部を梅林となし紅白の梅樹を植栽し林下に花卉秋草等を疎植し四時の觀覽に供し梅林中には若干の曲線歩道を設置し又円山入口より森林を経て頂上村落に至る旧道を取り付け沼の西片より折曲り北方境界点を迂回して神社の北境に沿ひ鳥居前より南方に折曲本道に出て公園を一廻すへき車馬道を開設し神社の後方森林の中心全部を芝生原野となし多数人の集合に適する運動場を設け其周囲に約十五町の競走道を新設し森林中には紅葉黄葉樹を散植し秋季満山に美観を添へ林下に走蛇の曲線道路若干を開設し逍遙に便ならしめ

第二区 円山入口左側在来畑地全部を平坦地となし周囲に松桜樹を疎植し一隅に体操器を据付清水を利用して飲料水と南方松林中に小径を開設し学校其他の運動場に供し養樹園事務室を改良し同付属舎を移設し構内に大弓道球技場等を設けて集会所となし溪流約五百間に沿ひ歩道を開設し若干の橋を架し散策に便ならしめ頂上の瀑布を改良し美観を添え沼を浚渫し護岸を修理して湖水となし遊船を浮へ・・・」⁶³⁾。

長岡は、神宮境内を含む一帯を円山公園設計に組み込み、境内の崇峻性や公園の美観を高めるため、自然立地特性や風致を活用することを旨に、春の花見や秋の観楓等の行楽や、溪流沿ひや池周辺の修景による散策など近世的利用と、大規模な運動場、球技場等や車馬道の設置などの近代的利用施設を取り入れた。しかしながら、長岡による設計は、日露戦争および予算上の制約があつて、すぐには実現しなかつた。「円山は当時直に其経営に着手するを得ず、唯三十七八年戦役記念として三十八年度より区内各小学校生徒をして記念植樹（四か年継続にして三万八千四百本）を為さしめたるに過ぎりしが、・・・先四十二年度に金四百五十四円を以て、円山公園の一部に苗園を設けて、菩提樹、吉野桜、落葉松等を植え付け、・・・」⁶⁴⁾。1909年、植樹・芝生の整備だけで、

施設整備がないまま公園が開設された。その後の整備では、設計に沿って、池の造成や溪流が整備され、また、立地場所や大きさに違いはあるものの、運動場や野球場の造成が実現した。

1880年から1909年の動向を中心に整理すると、円山公園の発端は、明治20年代後半、公園や緑地に対する社会的関心が高まった時代背景や、すでに観桜の名所として札幌神社境内が札幌市民に周知されていた社会情勢のもと、1901年に養樹園の閉鎖移転の動きを見越し、1900年に養樹園跡地に当時の区議が公園設置を提示したことにある。公園像として、岩村判官が1871年に提示した市街を取り囲む公園のうち、1887年に中島遊園地が開設し、区議は、中島遊園地の公園化を踏まえ、これと異なる特質を持った構想を提示した。1903年、区長が養樹園貸下げを熱心に懇願したことで御料局側の理解を獲得し、区会においても中島遊園地からの賃貸料を原資として、賃借料のめどや公園設置の意義について賛同を得たことによって貸下げが実現した。さらに同年、公園調査費の計上、了承を得たことが、1907年、長岡安平への設計依頼への途を開いた。そして、長岡による神社を含む円山公園一帯の円山公園設計方針による、境内の崇峻性や公園の美観を高める方向性が受け入れられ、設計方針で示された鑑賞や散策を中心とした近世的利用と、運動場や球技場など近代的利用の設計思想が、その後の円山公園整備の思想的基盤となつたと考えられる。

6. 保全・利用の視点からみた円山全体の変容

森林保護に関し、開拓使は1871年、「書面之伐木禁止被」⁶⁵⁾において札幌近傍町村でのイチイ、ハリギリ、イヌエンジュ、カツラ、トドマツ、ヤマザクラ、ドロノキの伐採を禁じた。1872年、円山山頂から石材を採掘し、山腹を転げ落とし山麓で加工、開拓使はこれを建造物・構造物の基礎として利用した⁶⁶⁾。1873年、大蔵省は「官林並ニ払下ノ件」⁶⁷⁾で「・・・開墾ノ名トシ一時立木我盡シ跡地不毛ニ相成候不勘趣元來山林ハ・・・風雨寒暑ヲ調和シ水旱涸溢ヲ節ニスル功不少然ルヲ一時我盡シ候而ハ不都合ニ有之ヨリ本年第二百五十七号公布之趣モ有之當時官林拂下禁止有之候得共向來官林之内水源ヲ涵養シ土砂ノ杆止シ又・・・故障有之箇所並右之外漸次拂下故障無之箇所共別紙離形ニ做ヒ・・・」とし、官林の払下げに際し、水源涵養や砂防上、支障のないことを求めた。1873年、開拓使は札幌周辺に官林を定め、円山を禁伐林に編入した。開拓使黒田長官は、円山の自然保護に関心を持ち、「之レヲ禁セザレバ風致ヲ損ズルノ患アルベシ」⁶⁸⁾とあり、円山からの石材採掘は自然の風致を損なう理由から伐採が禁止されたが⁶⁹⁾、水源涵養、砂防上の観点も考慮されたとみられる。

札幌農学校の学生時代に宮部金吾（後に札幌農学校の教授）は藻岩・円山を研究フィールドに植物を採取し、近代的な植物学を学んだ⁷⁰⁾。1892年、ハーバード大学の世界的植物学者サージェント教授が札幌農学校の宮部金吾博士とともに藻岩山で初の樹木、植物を採取した⁷¹⁾。教授が米国帰国後、「日本森林植物誌」の中で藻岩山の森林に触れ、この山と同じ気候の土地で、しかも小規模で低標高であるにも関わらず、多くの樹種があるところは世界的に珍しいと高く評価した⁷²⁾。これにより藻岩山と円山の植物に対する社会的関心が高まった。宮部教授は、その後、藻岩の植物を保護することの重要性を指摘し、行政はそれに応じて藻岩山山頂北側の自然林を保護する施策を行った⁷³⁾。

1913年、北海道が藻岩・円山を札幌地方を代表する原生天然保存林として選定した⁷⁴⁾。原生天然保存林として「昔から斧鉞を入れない森林または災害のため一時は原始の状態を変じてもその後発生した特殊樹種の天然林で、学術研究及び林業殖種その他事業上の参考資料ともなり、かつ地方の風致を兼ね、天然記念物として永久に保存すべき資質を備えるものであり、かつ交通上の便利な、地形の上で山火に安全なしかも付近森林の施業に支障となる

べき一切の関係を避けて・・・という条件で選定された⁷⁵⁾。1919年に史跡名勝天然記念物保存法が公布、これに基づく調査の結果、1921年3月、内務省告示により、円山原始林、藻岩原始林(北海道第1号の国の天然記念物に指定された⁷⁶⁾。天然樹林と人工の植林からなる美しい風致をもつ神社、円山、円山公園を含む円山一帯は、1939年5月に風致地区に指定され⁷⁷⁾、近代的な風致的視点から高い評価を得た。そして、円山原始林は、1943年、札幌経営区第一次経営案編成に際して、同経営区18林班として区画、停伐地として取り扱われた。

1946年、薪材として、公園内の4千坪のカエデ林が犠牲となった。「札幌市の燃料対策委員会は藻岩・円山の樹木の一部を伐採して市民に提供しようと決議したが、宮部の門下生だった教授たちが、札幌市百年の大計から考え、切り倒すことを思い止まるよう勧告した⁷⁸⁾。その後、1951年度調査の第三次経営にもとづき、札幌営林署が管理し山火事予防、盗伐誤伐防除の手が尽くされた⁷⁹⁾。1953年に館脇操博士らの研究は「天然記念物円山原始林調査概要」として札幌営林局から刊行、1958年に「札幌円山の自然科学的研究」が北海道教育委員会社会教育課から刊行された⁸⁰⁾。

一方、利用に関し、1881年の官林風土札幌郡官林署記で、「札幌市街ヨリ西ニ望ム山岳アリ総称シテ円山ト云ウ春ハ千種ノ花美ヲ麗ニシテ夏ハ緑陰麗ヲ極メ秋ハ紅葉錦ヲナシ冬ハ雪ヲ頂キテ玉ノ如シ四時ノ景趣歎クルモノナシ朝昏此風致ニ觀ルモノ自ラ胸襟ヲ爽快ナラシメ鬱鬱ヲ掃ハサルナシ之ノ禁伐令ノ由テ起ル所以ニシテ官民之ヲ守リ鉞ヲ入レズ其風致依然タリ・・・」⁸¹⁾と、その風致が賞賛されていた。

1887年5月の北海新聞によれば⁸²⁾、「円山は市街を距たること里余樹木蔚葱、山あり、水あり、大気は清涼にして幾と紅塵を去るとも云うべき閑静幽雅の地なれば瓢を携え漫步鬱を散せしむるに足るゆえ一昨日などの日曜日なれば大分本庁官吏諸氏には彼方へ趨けたる由」とあるように、一部の市民が散策の場として利用していた。1893年、お雇い外国人ブラキストンは円山山頂からの展望を楽しみ⁸³⁾、パッチェラーは外国人向けの著作で「円山ノ頂上ニ登レハ札幌市街並ニ近傍平原ヲ見渡シ其景色最モ爽ナリ」と述べ、円山を「札幌近傍ニ於テ最モ爽快ナル遊歩場」として推奨するなど⁸⁴⁾、お雇い外国人や札幌を訪れた外国人から、絶好の登山レクリエーションの地として円山が親しまれていた。しかし、当時の市民に円山登山が普及した資料や記事は見られなかった。一方、山麓に居住する円山農民は、当時、円山の山林から枯損木、風倒木、間伐材等の払い下げを受けて冬季間の薪炭材とした⁸⁵⁾。

1914年5月、円山村の開拓以来の地域指導者である上田万平に相談し、上田善七らによって円山に登山道が作られた。「・・・円山に登山道の開鑿を計画したのは大正3年で、当時、北海道庁では原生天然保安林の調査を為していた時である。善七氏は桜の名所として世に知られる札幌神社の境内の植林の美しさと、天然の風致に富む円山公園も次第に市民に親しまれることに鑑み、更に一步を進めて円山の原始林を広く世に紹介するには登山道を開くことを決意し、その筋の許可を受け、私費をもって660間の登山道を開鑿した。かくして山神の碑のある頂上まで登山道が完成し、これとともに一方成田山新栄寺住職神野実男師の努力により四国にある弘法大師の遺跡八十八箇所因みに円山に八十八箇所の創建となった⁸⁶⁾。その後、多くの登山利用が行われたが、その背景に、信仰登山の様相を帯びたことで市民が親近感を覚えたことや、1905年に日本山岳会が発足し、近代的山岳登山が普及し始めたこと⁸⁷⁾などがあると考えられる。

1915年2月 農科大学スキー部が円山でスキー競技大会を行い⁸⁸⁾、冬季レクリエーション利用の地として脚光を浴び始めた。1924年に円山公園まで札幌電気軌道会社の手によって路面電車が開通し⁸⁹⁾、札幌電気軌道会社助川専務は円山に娯楽園の経営を

企画し、1925年、今の坂下グラウンドの場所に、電気軌道会社により運動遊技場を設けた。築木、水平棒、回転塔、バスケットボールコート、相撲場等の遊楽場が設けられ⁹⁰⁾、家族連れの子どもらに人気を博した⁹¹⁾。1927年に電車は札幌市営となり、市営バスは1931年から運行をはじめ、円山の行楽を盛んにした。

全国的動向として、国民体力向上施設として公園が公衆衛生に組み込まれるのは、1916年、第一次世界大戦後に設置された保険衛生調査会が端緒となり、大正末期から昭和初期、一般の公園に運動場の増設が行われた⁹²⁾。1924年10月に新設された明治神宮外苑競技場において、内務省主催による全国規模で最初の第1回明治神宮競技大会が開催された⁹³⁾。

1921年に札幌区は御料地の払い下げを受け、体育施設として、1928年に滝ノ沢上流に田中政之が経営した7つ星童話会のプールができた。これをはじめに、1932年に大倉山シャンツエが完成し、円山公園にスポーツ施設充実を求める声が高まった⁹⁴⁾。坂下グラウンドは市の造成以前から市内天理教信者団体の奉仕によって整備が行われ、市内で唯一の競技場として学校の運動会に利用されていた。しかし、完全な平坦地ではなく、わずかながら東向斜面となっていたため、1933年に全市小学校長が坂下グラウンドの改修を建議し、一周200m幅10mのトラック及び100m直線コースのグラウンドが整備された。その後、毎年春秋には市内小学校の運動会が行われた⁹⁵⁾。

また、1932年から失業対策事業として札幌市は正規の陸上競技場を円山公園に新設を計画し、同年11月着工、1934年9月に竣工した。400mトラック、硬式野球場、テニスコート、相撲場などが整備され、市立総合グラウンドの名をもって、各種大会が開催され、運動競技の発展に寄与した⁹⁶⁾。整備には第二期計画があり、「相撲場も神宮の相撲競技場の如くし」とあるように、円山総合運動場が、東京の明治神宮外苑を念頭に置いて構想された⁹⁷⁾。戦後、グラウンドは米軍に接収、1950年に解除、1951年8月に日米陸上競技大会、1954年1月に世界スピードスケート選手権大会、同年8月に第9回国民体育大会が開催され、各種スポーツのメッカとして社会的名声を獲得した。

札幌市内の動物園は、長岡安平による「中島公園設計書」に記載された自然的動物園に発想の始まりがみられ、1926年に中島公園内に国産振興博覧会開催の際に動物園が設置された⁹⁸⁾。1948年秋、上野動物園の林技師が来札して高田市長に動物園の設置を勧めたことが円山動物園設置の動機とされる⁹⁹⁾。1950年に上野動物園から移動動物園を招き成功となり「札幌市に動物園を」という声が高まった¹⁰⁰⁾。高田市長、原田助役は設置場所に現敷地を選び、ついで古賀上野動物園長、北大福富教授らの調査を経て、1950年に整地し、児童遊戯施設をなし、翌1951年5月こども遊技場として発足し、動物も加えられ、1952年7月、動物園として正式に開園した¹⁰¹⁾。1957年、都市公園(総合公園)として円山公園が告示された。

1871年～1958年の動向を中心に整理すると、開拓使による円山山頂からの石材開発が1872年に行われたが、翌年に森林保護政策への政策転換によって中断されたことが契機となり、円山は乱伐から免れた。背景に、この場所が札幌神社の鎮座地の後背地にあたることも一因として考えられる。都市近郊に良好な森林植生が残されたことで、札幌農学校の学生に植物学に格好の学びの場を提供した。そこで植物学を学び、後に農学校で教鞭をとる宮部金吾をキーパーソンに、1892年サージェント教授によって藻岩山が高い評価を受けたことで、藻岩山と円山の植物への関心が高まった。その後も宮部の強い要請を受け、1913年に北海道庁が原生天然保存林として選定した。これが後に、1921年に国の天然記念物に指定、1943年に停伐地となり管理者から山林保護施策がなされるなど、学術的知見が基礎となり、大学人の支援、行政に

よる保護政策の推進を導いたと考えられる。一方、利用について、1881年に円山一帯の風致特性が評価され、1887年に円山山麓への散策利用が確認、1893年に小堀い外国人が円山登山の魅力を紹介、1914年に地元有力者がサクラの名所に加え、原始林の市民利用を促す目的で円山登山道を開設、1925年に地元企業による運動遊技場の設置、1933年に地域社会のニーズに対応した運動場の造成、1934年に国策を反映した競技場の造成、1952年に中島公園の設計思想を引き継ぎ動物園が設置された。このように、近代的な自然保護思想や公園利用形態の導入に際し、行政だけでなく、研究者、事業者、立場の異なる札幌市民が携わったことという事実の蓄積を通じて、円山公園一帯が一体的空間として、地域社会に認識される要因になったと考えられる。

7. 終わりに

都心郊外山麓に立地する円山公園の成立と変遷に関して社会文化的視点から史的考察を行った結果、次のことが確認された。隣接する札幌神社の鎮座における地形および都市計画上の重要性が円山という場所を意味づけた。神社側の社格向上の意図と市民・行政によるサクラの植樹や花見体験を通じて観桜の名所として社会的に定着化した。公園の発端時の都市公園に対する社会的認識の萌芽を背景とした行政関係者らの働きかけによる用地や予算確保、長岡安平が示した円山公園の設計思想がその後の公園整備の思想的基盤を提供した。周辺村落住民や札幌農学校教授宮部金吾、電鉄経営者、行政機関が示した公園および隣接域での自然保護や公園利用への働きかけが周辺環境との一体的認識の形成の要因となった。公園特性に対応して、異なる焦点から変遷過程を捉えた結果、社会文化的視点から史的論考を行う際に、公園が成立する場所の立地特性(空間)、公園という場所に刻まれた履歴(時間)、市民・行政・団体などの関係者の場所に対する関心・働きかけ(人間)の三要素を統合的に捉える観点が重要であると考えられた。他の事例との比較検討を重ねることによって、公園の社会文化的価値を捉える手法の改善や新たな評価軸を獲得しうるものと推定された。

謝辞：ご協力を頂いた札幌市公文書館、札幌市立中央図書館、北海道立図書館、北海道文書館に対し厚く謝意を表す。

補注及び引用文献

- 1) 探掘・製造・流通・往来及び居住に関する文化的景観の保護に関する調査研究会編・探掘・製造・流通・往来及び居住に関する文化的景観の保護に関する調査研究平成22年3月<www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/pdf/hokoku.pdf>、最終更新日不明、2014.9.14 参照
- 2) 進士五十八 (1992)：歴史的公園の保全と再生：造園雑誌55(3)、270-275
- 3) 小野良平 (2007)：近代の公園の文化的価値とその保全の意義：ランドスケープ研究70(4)、269-272
- 4) 小林昭裕 (2014)：札幌市大通にみる広幅員街路の公園化における社会文化的視点からの史的考察：ランドスケープ研究77(5)、633-638
- 5) 小林昭裕 (2015)：中島公園にみる都心に隣接した氾濫原の公園化における社会文化的視点からの史的考察：ランドスケープ研究78(5)、419-424
- 6) 札幌市みどりの推進部みどりの管理課 (2002)：円山公園 Map & Guide
- 7) 野中勝利 (2015)：近代の秋田(久保田)城址における公園化の背景と経緯：ランドスケープ研究78(5)、431-436
- 8) 田中潜 編集 (1958)：円山の歴史と自然：三洋印刷株式会社、44pp
- 9) 北海道神宮 國學院大學研究開発推進センター編 (2014)：北海道神宮研究論叢弘文堂、東京、412pp
- 10) 前掲9)
- 11) 前掲9)
- 12) 北海道神宮 (1991)：北海道神宮史 上巻：第一法規出版、東京、463pp
- 13) 北海道大学北方関係資料総合目録：石狩大府図：北海道大学附属図書館北方資料室所蔵 <[http://www2.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/contents/map/0D0107000000000000.jpg](http://www2.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/contents/map/0D01070000000000.jpg)>、最終更新日不明、2015.8.20 参照
- 14) 笠原三郎 (2010)：円山公園の沿革と現状について：ランドスケープシンポジウム2010 資料、ランドスケープシンポジウム実行委員会
- 15) 北海道神宮社務所 (1978)：鎮座滿百年記念(北海道神宮略史)：北海道神宮社務所、77pp
- 16) 前掲12)
- 17) 前掲9)
- 18) 河野常吉 (年代不明)：岩村判官の逸事：道立図書館所蔵、河野常吉資料 17「札幌資料」
- 19) 天野太郎 (2009)：明治初期の札幌市街地形成における札幌神社—札幌市形成期における神社の象徴的意義：地域と環境8・9合併号、177-187
- 20) 前掲19)
- 21) 前掲19)

- 22) 開拓使東京出張所庶務課 (1873)：「札幌神社新道、開造ノ件 付図」：第2部 開拓使公文書—東京出張所 その5、公文往復但社寺部 明治六年 北海道立文書館蔵
- 23) 都市計画北海道地方委員会 (1925)：札幌都市計画区域設定参考資料：北海道文書館所蔵
- 24) 都市計画北海道地方委員会 (1925)：「大札幌市区域及び地域設定略図 附公園廣路計画図」：札幌公文書館蔵
- 25) 札幌神社社務所 (1912)：官幣大社札幌神社志要：札幌神社社務所、19pp
- 26) 前掲12)
- 27) 前掲12)
- 28) 前掲12)
- 29) 前掲12)
- 30) 円山百年史編纂委員会 (1977)：円山百年史：円山百年史編纂協賛会発行、山藤印刷株式会社、407pp
- 31) 前掲8)
- 32) 前掲25)
- 33) 前掲12)
- 34) 北海道毎日新聞 1893年2月21日、札幌市公文書館蔵
- 35) 前掲9)
- 36) 前掲12)
- 37) 札幌市長政策室政策企画部企画課：人口の推移 「札幌市統計書(平成26年版)—人口」：<<http://www.city.sapporo.jp/toukei/tokeisyo/02population26.html>>、2015.4.17. 更新、2015.8.20. 参照
- 38) 前掲12)
- 39) 北海道毎日新聞 1889年5月31日、札幌市公文書館蔵
- 40) 北海道神宮 (1989)：写真 百二十年史：北海道神宮、ぎょうせい
- 41) 前掲40)
- 42) 前掲12)
- 43) 前掲25)
- 44) 前掲12)
- 45) 前掲12)
- 46) 前掲8)
- 47) 北海道札幌支庁 (1911)：町村誌資料 明治四十四年七月：北海道立文書館蔵
- 48) 前掲10)
- 49) 三関武治編(編纂年不明)：円山百年史資料(三) 教育・会館・公園：北海道文書館所蔵
- 50) 札幌市教育委員会文化資料室編集 (1980)：さっぽろ文庫 藻岩・円山：北海道新聞社、320pp.
- 51) 前掲31)
- 52) 前掲4)
- 53) 前掲8)
- 54) 北海タイムス 1903.4.24.
- 55) 北海タイムス 1903.10.16
- 56) 札幌市教育委員会編 (1994)：新札幌市史 第二巻通史三：札幌市、北海道新聞社
- 57) 札幌区 (1903)：区会決議録 廿二回、廿三回、廿四回 明治36年：札幌公文書館蔵
- 58) 札幌区 (1907)：札幌区事務報告 自明治39年10月至40年9月：札幌公文書館蔵
- 59) 北海タイムス 10月2日、21日、22日、25日、11月10日、12月14日、札幌市公文書館蔵
- 60) 小樽新聞 1908年3月19日、札幌市公文書館蔵
- 61) 札幌区役所編 (1973)：札幌区史(復刻)：名著出版、東京、1028pp
- 62) 長岡安平 (1908)：円山公園 中島公園 設計書：札幌公文書館蔵
- 63) 前掲62)
- 64) 前掲61)
- 65) 開拓使 (1871)：「書面之伐木禁止被」明治4年 部類抄録 二 地理部 国部・神社・寺院 開拓使 [札幌本庁庶務局編纂課] 1869~72 (明治2~5)：北海道文書館所蔵
- 66) 前掲50)
- 67) 開拓使函館支庁庶務課 (1873)：「官林並ニ払下ノ件」：院省府県往復文移録 地104号：北海道文書館所蔵
- 68) 前掲50)
- 69) 前掲50)
- 70) 札幌市政研究所：誇ろう・つなごう・札幌の自然 5p 2012 年夏<Booklet No.11<http://sizen.kei1.org/menu_05.html>、更新日不明、2015.9.17 参照
- 71) 増田清 (2013)：藻岩山原始林のこと：藻岩山麓だより、1p
- 72) 前掲50)
- 73) 前掲71)
- 74) 前掲50)
- 75) 前掲8)
- 76) 前掲50)
- 77) 前掲8)
- 78) 前掲70)
- 79) 前掲8)
- 80) 前掲8)
- 81) 開拓使地理課 (1891)：札幌郡官林畧記 第6号 円山禁伐林之部：北海道立図書館所蔵
- 82) 北海道新聞 1887年5月31日、札幌市公文書館蔵
- 83) 前掲50)
- 84) ジョン・パッチェラー 著 長岡照止訳 (1893)：「日本北海道案内記」：東京築地活版印刷所、44pp、近代デジタルライブラリー 国立国会図書館 <<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/763096>>、更新日不明、2015.8.27 参照
- 85) 前掲30)
- 86) 前掲8)
- 87) 小泉武栄 (2001)：登山の誕生：中央公論新社、東京、224pp
- 88) 前掲30)
- 89) 前掲8)
- 90) 前掲8)
- 91) 前掲49)
- 92) 丸山宏 (1994)：近代日本公園史の研究：p.137-159、思文閣出版、京都
- 93) 前掲92)
- 94) 前掲49)
- 95) 前掲30)
- 96) 前掲8)
- 97) 札幌市円山総合運動場 50年記念誌編集委員会 (1985)：札幌市円山総合運動場50年史、80pp
- 98) 前掲5)
- 99) 前掲8)
- 100) (社)日本造園学会北海道支部監修 (2011)：札幌のまちとともに歩んだ公園 大通公園、中島公園、円山公園：札幌市、38pp
- 101) 前掲8)